

伝染病が蔓延する街を逃れ
子作りのために
無人島へ避難した母子グループ

時は2035年。

世界各地で成人男性だけが罹患する死の伝染病が蔓延り、成人男性の大半が死亡するという大惨事となった。

そして残りの成人男性たちの多くも、数が限定されているワクチンの争奪によって起こった内戦によって命を失った。

残ったのは女性、そして子供と老人。

成人男性たちの多くがいなくなったこの地で自らの子孫を残していかなければならなくなった人々は、大人の女性と生殖能力のある〇人に満たない男子とでセックスをし、子作りに励むようになった。

また、内戦によって近隣同士の関係性も不穏になった状況の中で、必然的に身内同士での子作りも盛んに行われるようになった。

その代表が、夫を失った母親と息子によるセックスだ。

母子が肉体を結合し合い、新たな生命を作る。

以前まででは考えられなかったそんな衝撃的な事実が現実として起きているのだった・・・。

「でも・・・本当に大変なことになったものね」

「ほんとよ。平和な時には想像したこともなかったわ」

波音が響く夜の浜辺で、二人の34歳の女性が会話をしている。

上半身は何も身に着けておらず、下半身にはところどころ破れたパレオのような腰巻きを付けている。

ほんの少しため息交じりに夜空を見上げ話す二人。だけど不満や不安を伴ったため息ではなく、現状を受け入れ、現状もそれなりに幸せだと悟った上での穏便なため息。

二人とも30代半ばとはとても思えないようなプリンッと上を向いた大きな乳房を携えている。

その乳房の先っぽについている薄ピンク色の突起物はとても大きく、ピンと起き上がっており、時折波間を通り抜けて吹きつける風に当たってかすかに揺れる。

二人はママ友のユリナとタエだ。

彼女たちは伝染病と内戦によって夫を失い、さらに安住の地も失った街の住人の一人である。伝染病や内戦の危険から逃れるため、そして同時に子作りのため息子たちとこの危険性のない無人島へやってきたのだ。

この小さな無人島にいるのはユリナとタエだけではない。母と子を1ペアと考えると総勢10ペア。人数にして20人が母子グループと言う形でこの小さな島へやって来たのだ。

この白い砂の浜辺は毎晩母子グループが大乱交をする場となっている。

毎晩この場所で皆が裸で絡み合い、子作りに励むのだ。

母子グループがこの無人島へ来てはや3ヶ月が経ったが、母の子宮にはもう既にいくつもの生命が宿っており、お腹がポッコリ膨らんでいる母親も少なくない。

しかし、子作りという目的を掲げながらも、月日が経ち、大自然の生活にも慣れてくる中で、母も子も既に子作りと言うよりは皆でするセックスするという行為そのものを純粹に楽しんでいるという色合いの方が強くなっている現状であった。

「ママッ！おばさん！！そろそろ時間だよね??」

ユリナの息子である〇6歳のタダシが島内部のジャングルの中から浜辺へ出てきた。

恰好は全裸である。

「そうね……。じゃあそろそろ、今夜も皆で集まって始めましょう！！あら、もう準備万端じゃないっ」

タエがタダシの股間で直立してお腹にへばりついているセックスの準備万端のペニスを見て目を輝かせる。

タダシに続いてタダシと同年代の少年たちが裸で次々とやって来た。

皆、タダシと同様に“下半身の準備”はちゃんと出来ている。

そして、続いて彼らの母親たちもやってきた。
全員が勢ぞろいし、皆がそのかすかに汗ばむ肉体を火照らせてい
る。

何もない無人島。

野外で激しくぶつけ合う、目的などそれだけだ。

準備はもうこれで整ったのだ。

———体験版はここまでです———